雪の雫

豊原　紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪の雫

【Ｎコード】
Ｎ９４８５Ｙ

【作者名】
豊原　紫苑

【あらすじ】
育て親がまた子どもがほしくなったと言い出した。しかも調達（？）方法は誘拐。「えっと・・・犯罪ですよね？」「何を言う。犯罪ではない」「えっ・・・（常識だろ）」
そんなこんなでリースに思いがけず義妹が出来てしまって４年後。
リースはその義妹と一緒に旅に出た。（※プロローグを変えました。他のものも、少しずつ改訂していく予定です。）

プロローグ（前書き）

楽しく読んでくれると嬉しいなぁ。

プロローグ

花に彩られた冷たい石を、三人の人間がとり囲んでいた。
花を供えていた少女は、もっ花をつんでこようと、再び走り出す。
――もっとたくさんの花を。寂しくないようにしなきゃ。
が、行く手を阻まれた。

そして優しい声が響く。
「スノウ、もう大丈夫だから。そんなに花があっても義父さんが困るよ？」
あ、これはリース義兄さんの声。
少女は顔を上げる。そこには、一番上の義兄の顔があった。
義兄さんはいつも優しい。
「うん・・・分かった」
スノウと言う名の少女は頷いてまた墓の前に戻る。

その様子を確認した青年、リースは、ずっと黙っている義弟を見る。
今の彼に出来ることは義弟や義妹を慰めることだけだった。

「アルフ、そんなに擦ると目元が赤くなる」
「いいさ、別に。すぐになおる」

それなりに乗り越えようとしているのだろう、と思うことにする。

＊＊＊

リースは魔法を使って、墓にゆっくりと文字を、義父の名を刻んで

いく。
それは彼の義弟や義妹にとって、父が死んだということを改めて感じさせるものであった。
つっと涙が彼らの頬を伝った。

長い時間を掛けて文字を刻み終えたリースが立ちあがる。
「義父さん、今までありがとう」

僕らを育ててくれたことに、感謝を。

＊＊＊

空が赤く染まる頃には、三人の姿は見えなくなっていた。
残されはのは、色とりどりの花たちのみ。
その真ん中に刻まれていた文字には、こう書いてあった。

――我らの義父レヴィン、此処に眠る、と。

プロローグ（後書き）

プロローグを変えてしまいました。
ほんとに、スミマセン。
読んでくれてありがとう！

僕と義弟と育て親の日常。（前書き）

楽しく読んでくださいな。

僕と義弟と育て親の日常。

ここは、リテレイト王国という国にある古い森。
誰も寄り付かないその森では、三人の人間が一緒に暮らしていた。

＊＊＊

ふと規則正しい息遣いが聞こえた。

誰かここにいるのだろうか。

床で布団に包まっていた少年はぼんやりした頭でそれを聞く。
まだ頭があまり働かないので、特に驚きは見られなかった。

と、頭上から冷水が降ってくる。

（・・・やっぱり冬の水は冷たい）

少年はそんな事のんきなことを考えていた。
しかし、しかめ面だ。冬の水の冷たさは伊達ではない。
さっきまでぼんやりとしていた頭は既にはっきりとしていた。

少年は頭上を見てみる。
そこには初老の男性が一人。
彼の育て親が誇らしげに見下ろしていた。

いつもどおりの光景だ。

毎朝起きる時に水を掛けられるのも、隣で見下ろされながら重い体を起こすのも。
全て同じだ。
しかし、今日は起こすのが早くはないか、と少年は思う。

「相変わらず寝起きが悪いの、リース」

「・・・・・・ん、おはよう」

「アルフはもう鍛錬をしているが」

「――早くない？」

少年の名前はリースと言った。
そして今話題に上ったアルフという人物はリースの義弟である、アルフレッドである。
名前が長くて面倒なので、リースも彼の育て親も略して呼んでいる。
本人は嫌がっていたりするのだが、二人共気にしていない。

「おはよう、アルフ」

リースが呼びかけると、アルフレッドは手を止めて振り向く。
しぶしぶ、という感じだ。
素振りの邪魔をされたのが気にくわなかったらしい。

「お、兄貴。よく寝てたなぁ」

彼は一言そういって、また素振りをはじめようとするが、何を思ったか、はたと動きを止めた。
何か考えている様子である。
何を考えているのか。
リースの疑問はすぐに解けた。
目の前に木刀が迫ってきていたのである。
何故アルフレッドがそんな暴挙に出たのか。

彼はリースに体術、剣術などで勝った事がない。
四歳分の歳の差もあるのでそれは当然のこととともいえるが、寝起きでも構わず”一本取りたい”のだろ　う、ということは容易に想像できる。
一歩間違えば大怪我ものである。しかしアルフは自分よりも強いリースがよけきれないことなど考えて　もいなかった。

（狙っていたんだね、義弟クンよ）

リースはは内心慌てながら迫ってきた木刀をふわりと避けた。
といっても、表情を押し殺しているので傍目には余裕そのものである。
そして、その事がアルフレッドの対抗心をさらに燃やすことになると気づいていなかったりする。

「・・・ちっ」

「えっとね、義弟クン。寝起きの義兄さんに切りつけるのは反則だよ？」

「知るか」

最近の義弟はなんか反抗的だ、とリースはため息をついた。

「うむ、反抗期じゃの」

育て親は、なぜか嬉しそうだった。
どうやら、起こしたのはこれを避けさせるためだったらしい。
起きる前に斬りつけたら受け止められないかもしれない、とか囁いたのだろう。

相変わらず、悪趣味だ。

――――まあいい。アルフも鍛錬してるから僕もしようかな。

リースはそう思い腰をあげる。

今日もいつもと変わらない日常が訪れてきていた。

＊＊＊

黙々と箸を運ぶ。
今日の朝食は静かだとリースは思った。
どうやらいつもの日常ではないのかもしれない、とも感じた。

（だって、ねぇ）

変わったことと言えば育て親が静かすぎることだ。
いつもはもっと騒々しい。

沈黙のなか、ふとリースの横で声があがる。
「リース兄、それ俺が食う」
彼の義弟が示したのは皿の上の肉である。
余程の成長期なのか。
「いや、僕のおかずなんだけどね、それ。
まあ止めても強奪するよね、ほら」
「さんきゅ」
・・・・・・・・・・・・・・・
再び沈黙が戻ってきた。

と、育て親が朝食を食べ始めてから、初めて口を開いた。
かとおもえば、「わしは、もう一人子どもが欲しくなった」などとのたまう。

今、何を。
そう思ったのは、どうやらリースだけではなかったらしい。
リースがちらりと横を見ると、アルフレッドがぽかんと口を開けていた。

「「・・・・・・は？」」

何故かと理由を聞く。

「むさい男連中ばかりはもう飽き飽きなんだが」

「へえ」

アルフレッドは、まあそれもそうだと相槌を打つ。

しかし、高齢で、しかも相手がいない育て親に子どもなど作れるはずもないことは、見れば分かることだ。

リースは、はあとため息をついた。

「でも、どうするのさ？僕らみたいな捨て子を探して回るのか？」

捨て子なんてそういるわけじゃない。

そんな中で、どうやって見つけるのか。

甚だ疑問である。

朝の講義。（前書き）

楽しく読むことは大切です。

朝の講義。

捨て子を探して回るのか、というリースの問いを彼の育て親は否定し、こう答えた。

「これからするのは誘拐だ」と。

少しの沈黙の後に、内容を理解したアルフはぼそっと呟いた。

「・・・犯罪なんだろ？」

語尾が疑問形になっているのは育て親の言葉が自信満々だったせいである。

じっくり考えて意味を理解したリースも頷く。

「普通に考えてだめだよね・・・でも僕たちの義父さんは常識人じゃないからね」

微妙に哀れみの混じった視線で見られた育て親は、少しへこんだ。

慌てて反論する。

「犯罪ではあるが、決してこれは犯罪ではない」

「結局のところは犯罪だろ」

ぶつぶつと言っているアルフを華麗にスルーし、育て親は話し出す。

「わしは昔教えただろう、この国リテレイトでは法に背く者が大勢いる。法が意味を成さない、そんな所だ。どの面でそれが起きてい

るのかというと、奴隷売買だ。表ざたには決してならないが、貴族などは奴隷を飼っている。・・・奴隷には異形の者たちが多くてな。この国で街に出たらたちまち遠ざけられるだろう。他の国なら大丈夫なのだが。こんなことを黙認しているのはリテレイトくらいだ。生まれてすぐに親によって売られ、この環境でしか生きられないことを”刷り込み”される。存在そのものを消された者なのだ、奴隷は。そんな彼らをさらったところで、犯罪になると思うか？」

「・・・ならないな、多分」

「うん、そうだね」

そう問われると、それは悪いことではないのではないか。

聞いていたアルフとリースはそう思った。

親は大切に。（前書き）

楽しく読んで・・・
もう聞き飽きましたか？

まあ、楽しく読んでください。

親は大切に。

「じゃあ、行くかの」

「うん」「おう」

次の日、三人は少ない荷物を肩にかけて、家を出た。
街へは衣服や保存食料の買出しでごくたまにしか行かない。アルフレッドはどことなく嬉しそうだっ　た。
歩きながら、リースは途中何回も育て親に聞く。

「大丈夫？辛くない？」

「大丈夫に決まってる。誰だと思っておる」

そう話していると、アルフレッドが口を挟んだ。

「誰って、爺さんに決まってるだろ」

事実そうなのだが、面と向かって言われると嫌なものである。

「・・・・・・アルフお前、もう一度鍛えなおそうかの」

「――えっ、　　うわ、ごめんってぇぇ」

焦って謝るアルフレッドだが、時既に遅し。
バチンという音が鳴った。

「痛って・・・」

「当然の報いだ」

アルフレッドは僅かに赤くなった額を押えて蹲る。

（やっぱり義父さんのでこピンって最強？）

呻くアルフレッドを見ながらリースはのんきにそんなことを考えていた。

「おい、兄貴。助けろよ」

森に叫び声が響く。それに驚いたのか、鳥が数羽木から飛び立った。

＊＊＊

夜まで歩き続け、結局その日は野宿をすることになった。

場所を決め、「さて、薪を集めてくるか」と腰を上げかけた育て親をリースとアルフレッドは止めた。

「いいよ。薪はアルフが集めに行くし、調理は僕がする。義父さんは座って待ってて」

「よし、兄貴。爺さんを見張ってろよ！」

「見張るって・・・」

そう言い残して急ぎ足で去ったアルフレッドに、リースはため息をついて、調理を始めた。

（アルフとリース。いつの間にか、この子たちも大きくなったものだ）

彼らの育て親は静かに笑う。

――多分、今日歩いてわしが体力をかなり使っていたことも分かっているのだろう。気配りも出来るようになったのだな。

と思っていると、リースがこちらを見ているのに気づいた。

「・・・大丈夫？」

「大丈夫だ。心配するな」

そう聞かれて、とっさに言った肯定の言葉に短く「そう」と答えたリースはまた手元に注意を向けた。　この間から肉を捌かせているがまだ慣れていないのか、少し手つきが荒い。

しかし一生懸命だ。

仕方のないことであるが、リースを見ているとあいつを思い出してしまう。

リース。本当にお前は、あいつに。

「・・・似ているよ」

ぽつんと呟いた言葉は、空気を少し震わせただけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9485y/

雪の雫

2011年12月8日23時49分発行